----------(前回からの続き)----------

「だからぁー。それって彼が本命ってことじゃん」珍しくモトコが休憩室で仲間とコーヒーを飲んでいた。モトコの回りにはいつも人が集まり、ワイワイガヤガヤという雰囲気がある。

モトコ「あ、チアキ！聞いた？この休憩室のノートパソコン、撤去されるんだってぇ」
チアキ「えー。そうなの？残念だなぁ」
モトコ「誰も使ってなかったじゃん。オブジェにもなれないWindowsPC、哀れな奴らよ」

モトコは根っからのMacintoshユーザで、Windowsは全然だめだった。デザインは全てMacintoshでできればいいのにとも思っている。そもそも、モトコのいるグループは広告代理店を経由してのクライアントが多いから、主力がMacintoshになっているんだっけ。

私のグループはクライアントが比較的広範囲だから、Windowsの方を重宝しているんだけど。でも、もし自分がモトコのいるグループに配属されていたら、タイチ先輩にDOSを教えてもらおうなんて１ミリも思わなかっただろうなぁ…。

モトコはそれからうまくいっているのかどうか聞こうとも思ったが、相談を受けるまでは干渉しない性格のモトコは、声を掛けるだけにした。

モトコ「うーん、まぁ。ガンバんなよ、チアキ！」
チアキ「…うん」

すぐに返事が返らないところをみるとどうも進展はなさそうねと思いながら、モトコは仲間と職場に戻っていった。入れ替わりにタイチと数人がどかどかと入ってきた。どうも、ノートパソコンの撤去に来たらしい。手分けして作業を始めた。チアキが自販機の紙コップコーヒーを飲みながら、光がまぶしくなり始めた窓から広がる風景を眺めていると、タイチが話し掛けてきた。

タイチ「おめでとう。鈴木さん。ちょっと、季節はずれだけど、ウェブデザイン部のリーダとして、正式に辞令が出たよ。さっき」
チアキ「あ、はい。頑張ります」

実は、アキコから事前にその旨を伝えられて、業務の引継ぎを受けていたところだったので、驚きはしなかった。それにアキコが戻ってからの在職期間がそれほど長くはなかったことと、リーダといっても単に仕事のマネージメントが主なので、今までチアキが部分的にやっていたデザイン方針の決定や、

人員割り振り、スケジュール管理の権限が増えた感じに過ぎなかった。

それよりもチアキは、タイチが改めて鈴木さんと言ったことにドキッとした。みんなの前だとやっぱりイヤなのかなぁ…。社交辞令的なタイチ先輩の話し方が寂しく感じた。

タイチ「今年で入社三年目ということで、早すぎるかなとは思うんだけど、仕事の流れもわかっているし、打ち合わせ経験もあるから大丈夫だよ。営業部隊は今までどおりだから、そういった経験を背景にして、デザイン的・技術的な詰めの時に力を発揮してくれると助かるよ」
チアキ「はい…」
タイチ「みんな期待しているみたいだよ。きっとチアキちゃんならやれるよ」

今度は"ちゃん"付けして自分を呼んでくれた！ちょっぴり嬉しく感じるチアキだった。それに呼応して答えるチアキの声に力がこもった。

チアキ「頑張ります。それと…タイチ先輩。昨日はありがとうございました」
タイチ「どうってことないよ。理解できたかな、リダイレクトは」
チアキ「少しは」

「無線パソコンだから撤去作業は早いなぁ」と誰かが話しているのが聞こえて、気がつくとノートパソコンはタイチとチアキが話している席にある一台だけになっていた。「どうしますか？」との後輩から問いに後から自分が持っていくと答えるタイチ。

タイチ「ええっと、時間が許せばなんだけど、リダイレクトとパイプの関係をちょこっと教えようか？このノートパソコンで説明できるのは最後になるけどね」
チアキ「ちょうど、クライアントに納品したウェブサイトのチェックを終えたところで、休憩していたところなんです。是非、お願いします」

チアキは、自分のスタイルと自分なりの変わらない気持ちで、DOSの説明を受けることが、二人の距離を縮めるためには大切な歩みなんだと信じていた。

チアキは職場に戻って、昨日タイチ先輩がコピーしてくれたFDといつものノートを大事そうに胸に抱えて戻ってきた。タイチはノートパソコンを立ち上げてコーヒーを飲みながらスタンバイしていた。

チアキ「お待たせしました」
タイチ「じゃ、はじめようか。今から話すことが、Windowsにできなくて、DOSにだけできる究極の技法なんだ。これを知るためにチアキちゃんは今まで努力してきたようなものなんだ」

"DOSを知るために努力"という言葉はちょっと胸にチクリとする言葉だった。

タイチ先輩って女性の気持ちに疎いよ…。私の努力はDOSを理解するためだけじゃない…。

自分の気持ちに素直になることを決めていたチアキは、意外に冷静にタイチを見ている自分に驚いた。

タイチ「リダイレクトの親戚のようなものだから難しくはないんだけど、考え方はしっかりと理解するんだよ。ノートを見せてくれる？」

チアキがさっとノートを差し出すと、タイチは昨夜に書いた図を指差した。

```
[入力元]                                [出力先]

ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ  >>---+                                  +--->> CRT
              |                                  |
ﾌｧｲﾙ      >---+---> 標準入力       標準出力 ---+--->  ﾌｧｲﾙ
              |     (stdin)        (stdout)     |
RS-232C  >---+                                  +---> RS-232C
```

※標準入力がキーボードで標準出力がCRTの場合(打った文字が画面に出る)。

タイチ「それはパイプという考え方なんだ。この図をじっと見ていると標準入力と標準出力が何か関係があって繋がるような感じがしない？」
チアキ「…」
タイチ「大陸移動の発見みたいなもんだよ。何か似た部分がヒントなんだ」

何が大陸移動なの？もう、クイズやパズルじゃないんだから。イジワルなタイチの問いかけに答えようとチアキは必死に頭を回転させた。いろいろ聞いたことを組み合わせて答えを出すのが得意なチアキだが、その答えのきっかけは掴めそうになかった。ある程度、チアキが考え込むのを見て、タイチは先ほどの図の真ん中に何か書き加えた。

タイチ「実は、標準入出力を繋げているものがプログラムなんだ」

```
[入力元]                                    [出力先]
                                  +--+
ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ  >>---+                   |プ|                  +--->> CRT
              |                   |ロ|                  |
ﾌｧｲﾙ      >---+---> 標準入力 ---|グ|--- 標準出力 ---+--->  ﾌｧｲﾙ
              |     (stdin)       |ラ|    (stdout)     |
RS-232C  >---+                   |ム|                  +---> RS-232C
                                  +--+
```

きょとんとするチアキに構わず、タイチは説明を続けていった。

タイチ「typeって、コマンドだよね。コマンドって要はプログラムなんだ」
チアキ「…」
タイチ「dirって、コマンドだよね。これもプログラムなんだ」
チアキ「…」
タイチ「よ～く、図と照らし合わせてみて考えてごらん。typeコマンド、つまりプログラムはテキストファイルからの入力をCRTに出しているに過ぎないんだ。あ、CRTって画面のことね」
チアキ「…」

あー、今は理解できそうもないわ。何がわからないかもわからないし、なぜそうするのかもわからないよ。多分、概念的な話なんだろうけど、質問するにも何を質問していいのかもわからないし…。

途中から理解できないと観念したのか、チアキはメモ魔となってノートに凄い勢いでタイチの言葉を書き取っていた。

タイチ「前にdirコマンドの表示をファイルに保存したでしょ？」
チアキ「あ、はい…」

カリカリカリ…。チアキのメモは凄いスピードだった。タイチは前にチアキと打ち合わせで同席したことを思い出した。そういえば、あの時もチアキちゃんのヒアリングをしながらのメモ書きは名人芸だった。綺麗にまとめながら凄いスピードで書いていく様子に舌を巻いたものだった。

チアキがメモを取り終わるのを待って、タイチはゆっくりと続けた。

タイチ「この場合は、dirコマンドつまりプログラムは、通常はCRTに出力するようになっているんだけど、それをリダイレクトで繋ぎ変えて、ファイルに出力させたんだよ」
チアキ「…」
タイチ「まとめると、パイプはこれらの仕組みを利用して、プログラムとプログラム間で標準入出力を結合するんだ」

カリカリカリ…。悩みながら必死にメモを取っているチアキに申し訳なさそうに、タイチは続けた。

タイチ「これは実際にやってみながら、理解するよりないと思うよ。でも、一旦、わかると間違いなく世界が変わって見えるんだ」

結局、そうなるわけね。でも、世界が変わって見えるって言われると知りたがり屋のチアキとしては、理解しなきゃならないって気がした。まったく、タイチ先輩は知識欲を刺激するのが上手のよね…。書き取ったメモを見つめるチアキをタイチが区切りのある話し方で続けた。

タイチ「ところで、チアキちゃん、明後日に新しいクライアントとのウェブサイト構築のヒアリングでしょ？僕も同席するんだけど、その帰りに喫茶店で続きを教えるよ。今はこれ以上時間が取れないからさ。それで、悪いんだけど総務に言って、このノートパソコンをキープしておいてくれるかな？」
チアキ「はい。できる限りパイプってのを理解するよう"努力"します」
タイチ「期待してるね。じゃあ」

タイチは飲みかけのコーヒーを一気に流し込むと、急いで職場に戻っていった。あぁ、やっぱり、わかってくれてない…。タイチ先輩。

＊

次の日の午前に、有給休暇を消化して退職の手続きに来たアキコに久しぶりにあった。チアキへの正式辞令の翌日がアキコの退職日だった。アキコの希望で送別会をしなかったので、これが本当にアキコと会える最後だった。いつもは元気なモトコもアキコ先輩に思い入れがあったためか、朝から黙り込んでいた。

アキコは挨拶回りだけを済ませると最後にチアキを呼び出した。アキコと二人きりで話をする最後の機会だった。チアキは大きく息をしてアキコの待つミーティングルームに入った。幸い、周りには誰もいない。

アキコ「会社でこういう話をするのは私のポリシーに反するけど…」

やっぱり、仕事の話じゃないんだ。きっとタイチ先輩のことだ。チアキに緊張が走った。

アキコ「タイチくんには、今回の件でいろいろと相談にのってもらったわ」

エッ！アキコさんて、"タイチくん"て呼ぶんだ。昔の職場で二人がどう呼びあってたか想像もしていなかったチアキには、ちょっとショックだった。

アキコ「詳しくは言わないけど、いろいろあってね。でも、自分のポリシーってなんだったんだろうかなぁって思うのよ。タイチくんにはタイチくんの考えがあって、私には私の、他の人には他の考えがあって…」
チアキ「…」
アキコ「そりゃあ、最終的にはビジネスの上では二人が目指した形に近くはなったけど、本当にそれが大切だったのかなって、思うのよ。本質とか主義とか方針とかルールとかなんて、どうでもいいのかもね」

アキコがビジネス用語以外で自然に話すのを初めて聞いた。今までは上司という立場でしか自分に接しようとしなかったアキコに、距離感を持っていた

チアキだが、この空間では立場の違う二人が、同じ女性として何か共有するものが流れ始めていた。

アキコ「自分に素直でなくなるとすれ違っちゃうのよ。そのうちにどれが本当なのかわからなくなるの。今から思うと、お互いのタイミングがほんのちょっと違っただけかも知れないのにね…」
チアキ「…」

ここまで話したアキコは、きりっとチアキを見据えた。胸がきゅっとしたチアキだったが、黙ってこちらを見ているアキコの真剣なまなざしに真剣に応じようと努力した。それを見て取ったのかアキコは少しの間をおいて続けた。

アキコ「…私にとって彼がどんな存在だったかを、同姓としてわかって欲しかっただけ。チアキさんはチアキさんのスタイルとタイミングがあるものね」

アキコ「行っていいわ…」
チアキ「…はい」

何も言えなかった…。聞きたいことも聞けなかった。ドアを閉じようとしたチアキに、聞きたいことは前から承知済みという感じでアキコの声が追いかけた。

アキコ「とにかく、何もないわ。それで汲み取って」

*

アキコは身の回りの物をダンボール箱に詰めて、退職していった。チアキ、そして、アキコに育てられたと言っていたモトコと古参の社員が見送りに出ていた。モトコは半べそだ。最後に握手したチアキに「がんばって」とアキコが耳元でそっとつぶやいた。

数分後、チアキは職場の窓から駅に向かう道を眺めていた。駅に向かう道にはちょうど昼の時間なのかランチに向かう人がたくさん見える。他の人には普通の風景、普通の時間…。でも、いろんなことに別れを決めたアキコさんには違うふうに見えているんだろうな。

---------- (つづく) ----------

Copyright(C) 2005 rpn hacks! All rights reserved